

特集Ⅱ 追悼：鑑 幹八郎先生

鑑先生の講義を受けて

中 島 千 恵

京都文教大学こども教育学部教授

人のご縁は不思議なものでございます。私は広島大学の学部在学中に鑑先生の授業を履修しました。私は心理学専攻ではありませんから、大学卒業して何十年もたって広島から遠く離れた京都の職場で再び先生とお会いすることになるなど、実に寄寓としか言いようがありません。本学の短大から四大に移った時にお会いすることになったのです。退職されるまで、大学運営会議でほぼ毎月お会いし、それ以外にも時々、学長室や研究室でお話する機会を得ておりました。

私が鑑先生の授業を履修した頃、鑑先生は働き盛りでした。学術的にも、学会での地位も恐らく日本の臨床心理学では知らぬ人はいなかったのではないかと想像いたします。ただ、私は専攻が臨床心理学ではなかったもので、京大で勉強された立派な先生くらいにしか思っておりませんでした。当時の広島大学では心理学は教育学部の中にありました。私は教育学部教育学科に所属していましたので、心理学の諸領域や諸先生方についてはあまり知りませんでした。いや、正確に申しますと、まだ学部生だったので、自分が所属する教育学の諸領域や講座を率いておられる諸先生方についても何も知らなかったのです。しかし、広島大学では心理学関係の講義を自由に受講できましたし、必修になっていた科目もあります。あの時、臨床心理学が必修だったのか記憶にありませんが、若者ならば誰でも興味を持つのではないのでしょうか。私もその内容に興味をもって履修登録しました。

Ciniiで検索すると、この頃、鑑先生は心理療法における夢分析や自我同一性の危機に関するご研究を広島大学教育学部紀要に発表してお

られます。論文を読んで興味を持ったというのではなく、自然と惹かれていく授業内容だったのだと思います。

大学の講義内容を何十年も詳しく覚えていられるものではありませんが、どの先生の講義でも忘れられないことはあるものです。鑑先生の場合、2つあります。その一つは、夢分析治療におけるカウンセラーとクライアントの関係です。自分の悩みに興味をもって耳を傾けてくれる人、自分を肯定的に理解してくれる人に対して自然と愛情を感じていく人間の本质を知ったような気がしていました。

もうひとつ30年以上たった今でも記憶に残るのは自殺する人の話です。精神的に追い詰められている人は、カウンセラーのもとにやってきて、「あー！生きるのがしんどい、苦しい。先生、どうか聞いてください、助けてください」と苦しい表情を包み隠すこともなく、必死に訴えてきそうに思います。しかし、むしろ、特に用事ではないけどちょっと覗いてみた、とかいうのが要注意ですよと教えてくださったのです。相手に心配されない、あるいは気取られないようにしてフッと自殺してしまうことがあるのです。この話が私の胸深くにずっと長く突き刺さっているのです。現在でも、突然の自殺のニュースを聞くと鑑先生の授業を思い出します。

2つの学びは教育における人間関係や距離の取り方にも通じる点があります。何十年もたってこれらの学びが思いもかけず自分の仕事に役立っていると気づいております。感謝の思いが先生に届きますように。